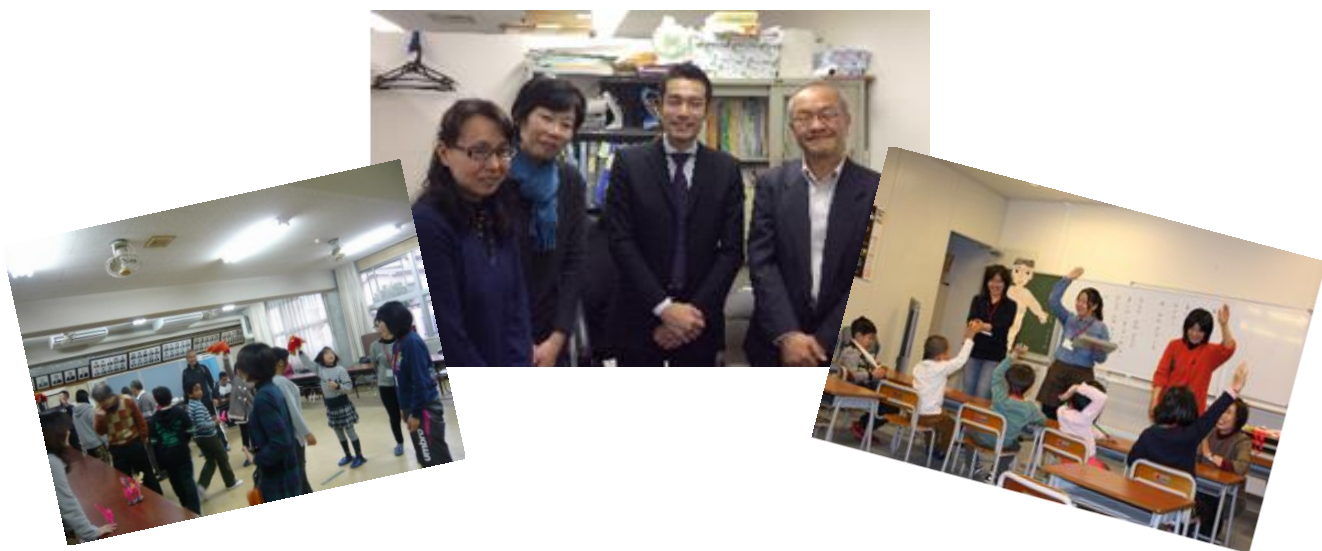


OKoTaC 通信

2014年2月10日発行

NO.15

オコタック



P 2-3 NPO活動報告(1)

学習会『外国にルーツをもつ子どもの学習上のつまずきと支援のあり方
～支援教育の観点から～』

P 4 NPO活動報告(2)

OKoTaC セミナー兼会員交流会『タイと日本のはざまに生きる子どもたち
～5年間の現地調査から見てきたもの～』

高野西区長、NPO事務所を訪問！

P 5 多文化な子ども@大阪のニュース

『外国にルーツをもつ子どもたちのクリスマス会』
『外国にルーツを持つ子どものためのプレスクール』

P 6 地域の子ども支援教室から⑮

『SALA (サーラ)』八尾市国際交流センター (八尾市)

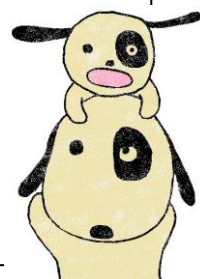
P 7 特別寄稿

『多文化キッズキャンプ in 岩手山』
～東北の外国につながる子どもの教育支援～

P 8 イベント情報

※編集部よりお知らせ

これまで毎号連載してきた『Air Mail メキシコ便り』は、編集の都合上、今号はお休みとさせていただきます。どうぞご了承ください。





おおさかこども多文化センター 活動報告(1)

学習会『外国にルーツをもつ子どもの学習上のつまずきと支援のあり方 ～支援教育の観点から～』

2013年12月7日(土)、大阪府教育センターで、梅花女子大学の伊丹昌一教授をお招きし学習会を行いました。府立高校教員時代には渡日生にも関わられた経験をお持ちで、支援教育の専門家として様々な事例を見てこられた先生の、“教育のユニバーサルデザイン”をキーワードにしたお話は、外国ルーツの子どもたちの支援のヒントになる部分も多く、教員や教育サポーターなど81名の参加者たちは熱心に聞き入っていました。

渡日生の学校現場では他の教室で個別に指導する場合と通常クラスで他の子どもたちと一緒に授業する場合がありますが、伊丹先生のお話は主に後者の場合で、集団の中でハンディのある子どもと、そうではない子どもが同じ教室で共に学ぶにはどのような配慮が必要であるかを、支援教育の実践を通してお話していただきました。紙面の都合で内容の一部を報告させていただきます。



伊丹 昌一先生

まずは「誰もがわかる授業づくり(支援のユニバーサルデザイン化)」についてです。

ハンディのある子どもにとって、勉強がわかった、わかったからおもしろかった、そのことで自分が授業に参加できていることを実感できている。このことにより教室が自分の居場所として認識できていることが大事です。そして、それを実現するために、渡日生のように言葉、文字の習得につまずきがある子どもに配慮した板書の工夫(できるだけ消さずに残す分割法)や絵、写真、実物の利用など視覚教材を多用することです。実はこの方法は決してハンディをもつ子どもだけでなく、そうでない子どももわかりやすい授業として有効になります。つまり特定の子どものみを対象とするものでないという意味で教育の「ユニバーサルデザイン化」です。この手法でおこなえば、渡日生を特別扱いして自尊心を傷つけることなく教育効果をあげることができます。

次に話されたことは「インクルーシブ教育」です。(注 2006年12月に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」に登場し、文科省のHPでは「包括する教育」と訳されている)

これはハンディのある子どもも、そうでない子どもも共に同じ教室で学び合う教育です。

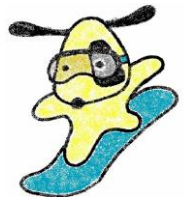
そこでは、わからなさ、間違い、失敗を否定しない、つまり仲間を肯定的にみる雰囲気のある学級集団である必要があります。教員はそのような雰囲気、集団をつくるため、多くの場面で工夫、しかけをおこなわなければなりません。講演ではそのいくつかの手法が紹介されました。

学習会の後半では渡日の男子生徒の支援事例を参考にワークショップをおこないました。この場には小中高の教員、日本語教師、支援ボランティア、学生など立場も関わり方も異なる参加者が集っており、このワークショップを通じて自らの立場とは異なる方々と支援方法を探る中で交流することができました。(Y.H)



学習会後のアンケートより

- “大きな大人が笑っているから、子どもが笑う”という言葉に涙が出そうでした。ふだん、どれだけ笑えているかな、と反省。支援の必要な子への支援は、すべてのこどもたちのためにもなる。誰もが安心できる環境作り、これからも努力していきたいです。
- 集団の中で支援すること、“本人”が自己選択することなど、特別扱いしないということも必要なんだな、と思いました。
- 教育者、ボランティアの方のお話は学生の私からすると、とても刺激を受ける良い機会になりました。参加させていただきありがとうございます。



今回の学習会に参加いただいた会員であり、かつ「中国等帰国生徒および外国人生徒入学者選抜」(以下特別枠)を実施している大阪府立八尾北高校で、渡日の生徒たちの担任をされた金沢幸恵先生に、講演を聴かれての感想を書きいただきました。



伊丹先生の講演は、私が現場で関わっている外国にルーツをもつ生徒との関わりについて振り返る機会となった。私自身は、一個人に対する支援と学級集団づくりの中での支援と、その両方にしっかり取り組んできたかと聞かれれば、もっとできたことがあったのではと後悔していることの方が多い。一口に、外国にルーツをもつと言っても生徒を取り巻く状況は様々である。以下は、私がこの3年間関わってきた生徒たちとの話である。

A は、日本生まれで外国籍を有していた。両親は懇談でも日本語で意思疎通をはかることができる。1年生での多文化共生をテーマにした人権学習を行った時、友人との何気ない会話の中で、自分が外国籍を有していることを告げる場面があった。これに関しては、A にとってクラスまたは友人たちが安心できる居場所になっていたのだと嬉しく感じたことを印象深く覚えている。そして保護者が本名でサインした学校宛文書や、科目選択では母語を選択し学んでいたことなどから、自身が外国籍を有していることをきちんと受け止め、向き合っているものだと思っていた。ところが、3年生になり奨学金の申し込み書類を書いて持ってきたときのことである。そこで初めて知ったのだが、A の両親は日本語を話すことができても書くことは困難であり、ご自身の名前を書くことしかできないと言うのだ。本人は今まで何度もこのような状況を通して当たり前のこととして受け止めてきたのだろうか、それとも幾度か悩みを抱えたことがあったのだろうか。外国にルーツをもつ生徒は様々な背景があるとわかっていたのに、こんなことが有り得ることに初めて直面し、A がこのような状況を抱えていたことについて深く話ができる関係を3年間で築くに至らなかったことに、私は後悔と不甲斐無さを感じている。



B は日本生まれでも家庭での言語は違うという状況で、保護者とコミュニケーションを十分に取れていない現状であった。本人の日本語力にも多少心配はあったが、支えてくれる友人が多かった。進路の話をした時のこと、「大学には家を出て通い、日本語を勉強したい」という B の話から、保護者が話す母語はニュアンスがわかる程度で、逆に本人が話す日本語を保護者はほとんど理解できていない状況だということを知った。日本語力の影響か、学業成績も振るわず、指導が入る場面も幾度かあった。ただ B には没頭できる趣味があり、そのことで友人たちと過ごしているのを見かけると、B が安心していられる居場所はあると安心した。

本校には「特別枠」で入学してくる生徒たちがいる。彼らの担任を持った2年間は、日本語への配慮はしたものの、後は他の生徒たちと変わらず接してきた。ただ、クラスの他の生徒達に彼らもこのクラスの一員であること、また彼ら自身に、自分たちはクラスの一員であり、ここは居場所であることを自覚できるよう働きかけるようにしてきた。例えば、学校行事では生徒に役割を決めさせ一緒に責任をもってやらせたり、彼らが活躍できる場を演出できるように努めた。このようなことを通して、今では外国にルーツがある生徒もそうでない生徒も、クラスで一緒に過ごしている姿を見るようになった。主には、スマートフォンのゲームを共に楽しんでいるようだが、ゲームが言語の壁を越えたのを見ると、「またゲームしてるの?!」と言いたいところを、思わずのみこんでしまう。クラスで卒業の歌を練習している時、「読めない漢字とかある?」と何人かの生徒たちが彼らの周りを囲みながら歌っているのを見て、胸が熱くなる出来事もあった。

以上の生徒たちとの関わりから、集団の中での支援の大切さを学ぶことができた。今後は、一個人への支援も十分に行えるよう、生徒たちとしっかりと向き合っていきたいと思う。それは、外国にルーツをもつようがいまいが関係なく、どの生徒にも当てはまることである。伊丹先生のご講話のお陰で、私自身が生徒とどう向き合ってきたのかを振り返り、反省し、今後活かすための機会となった。貴重なご講話、ありがとうございました。

(おおさかこども多文化センター会員 大阪府立八尾北高等学校 金沢 幸恵)



おおさか子ども多文化センター 活動報告（2）

OKoTaC セミナー 兼 会員交流会

『タイと日本のはざまに生きる子どもたち ～5年間の現地調査から見えてきたもの～』

おおさか子ども多文化センターの会員が一堂に集まれる場は年に一度の総会ですが、それ以外にも交流と情報交換の場を設けようとの趣旨で2013年12月7日(土)ヒューライツ大阪セミナー室において、「タイと日本のはざまに生きる子どもたち」と題した講演と交流会が13名の参加でおこなわれました。講師は大阪市「帰国した子どもの教育センター校」のひとつである豊崎中学校教員で、NPO 会員でもある矢嶋ルツさんでした。

矢嶋さんは年に1回、5年間にわたってタイを訪問されています。

2008年タイ北部チェンライから編入した生徒の受け入れをきっかけに、生徒が来日前にサポートを受けていた現地NGO「タイ日移住女性ねっとワーク」(SEPOM)、タイ日国際児センター(TJC)との連携が始まり、現地調査に行かれることになりました。タイでは大阪市にきた女性や子どもたちの社会的背景と、帰国後の彼、彼女らの状況の聞き取りや、家庭・学校訪問、TJCセンターが行っている日本語教室や自尊意識育成ワークショップへの参加など、タイと日本の取り組みを検証し、有効なアプローチをさぐるための活動を行われました。そのような中で浮かび上がってきた課題は多く、連絡が途絶えてしまった父を子どもが探し続けるといった家族の問題や貧困問題、また、順当に国籍を取得できない事情を持った子どもなどが存在します。自分のアイデンティティをなかなか確立できない子どものため、矢嶋さんは教育現場の取り組みとして「自己実現意識」の育成に力を注ぎたいと締めくくられました。

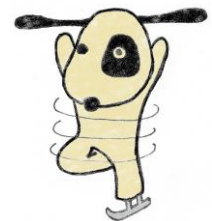
(H. K)



.....

高野西区長、NPO事務所を訪問！

大阪市西区には区民の意見・提案を聴取し、区政に活かすため、西区内で活動する多種多様なグループ・サークル等を訪問する『ぶらっと訪問～キテ！ミテ！高野区長～』という企画があります。この一環として、2月6日(木)NPO事務所(大阪市西区)を高野賢区長が訪問されました。



高野区長(後列中央)

まず、私たちの活動内容を簡単に説明し、大阪市立中央図書館でおこなっている『多文化にふれる えほんのひろば』や現在、作成中の外国人のための『西区子育てハンドブック 多言語版』など、西区での活動も紹介しました。さらに私たちからの提言として、日本語が身につけていない新たな外国人が役所で手続きする際、いくつかの部署を回されるのではなく「ワンストップ」型の手続きにすることや、不便を感じている外国人の声を聞く機会として、職員に対する研修を企画してほしいことなどを提案したところ、

区長として前向きに対応すると言ってくださいました。高野区長は私たちの言葉に、うなずきながら耳を傾け、ときにはご自身のタイ、デンマークなどに赴任された時の経験も話されました。

いま、各区の公募区長が話題にのぼっていますが、このように地域で生活している人や活動している人々の声を直接聞いて、区政に生かすという姿勢がこれまで以上に進むなら歓迎すべきことです。

(Y. H)



『外国にルーツをもつ子どもたちのクリスマス会』

(とんだばやし国際交流協会)

毎年 2 学期終業式の日、小学校の一室に集まってクリスマス会が開かれます。今年は小学生から大人まで、約 40 名参加しました。会場である教室は子どもたちが飾り付けをします。プログラムは子どもたちで考え、司会進行、すべての運営を子どもたち自身で行います。

今年はチャング演奏、得意のダンス、体操等の発表や各国の遊びを体験したりして大賑わいでした。数年前までは少し恥ずかしそうに発表していた子が、今は立派に自分の特技をみんなに見せてくれます。このクリスマス会での発表、ドキドキしながら経験を積むことが自信につながったのでしょうか。ビンゴゲームではサンタさんからプレゼントをもらいました。そしてもうひとつ、手作りのお菓子の差し入れも毎年恒例の楽しみになっています。お菓子を食べながらお喋りしたり、サンタさんからのプレゼントで遊んだり、外国にルーツを持つ子どもたちが集まれる年末最後のイベントです。

(とんだばやし国際交流協会 事務局長 前川仁三夫)



『外国にルーツを持つ子どものためのプレスクール』

(大阪国際交流センター)

大阪に暮らす外国人の増加とともに、両親が外国人であったり、父母のいずれかが外国人であるなど、いわゆる外国にルーツを持つ子どもが増えています。

そういった子どもたちが日本の小学校に入学するにあたって学習がスムーズに進むよう、そして学校生活に早く馴染



めるよう、(公財)大阪国際交流センターでは、日本の小学校入学直前の 1 月～3 月の毎週土曜日に「プレスクール」(全 8 回)を開催しています。今年は、中国、台湾、韓国、タイ、インドネシア、フランスにルーツを持つ子どもたち 9 名が参加しています。

「プレスクール」では、事前に研修を受けたボランティアが、カリキュラムに沿って作成した教材を使い、歌やゲームなどを交えて、興味を持って、楽しみながら学校の教室の名前や学校で使うものの名前、お掃除や給食について指導しています。

また、教室には、小学校と同じ 1 年生向けの大きさの机と椅子を用意し、黒板を使って少しでも学校と同じような環境づくりをし、学校の教室の名前を学んだあとに、近隣の小学校を保護者とともに訪問し、実際の小学校の様子を見学する体験も行っています。

今年で 4 年目を迎えた「プレスクール」ですが、参加した保護者からは「日本の学校のことを知らなくて不安だったが、これで安心した」「なぜ持ち物すべてに名前を書くのかよくわからなかったが、日本では自分が使うものには必ず名前を書くということがわかった」などの感想があり、保護者にも日本の小学校について馴染んでいただくきっかけになるよう、今年からは保護者向けの「保護者会」も同時に開催しています。

今後も小学校入学後スムーズに学校生活に受け入れるよう、「プレスクール」を開催していく予定です。

((公財)大阪国際交流センター 泉井実香)



**『SALA (サーラ)』** (大阪府八尾市)

公益財団法人 八尾市国際交流センター(YIC)では、外国にルーツをもつ小学生・中学生とその保護者を対象にした事業「子どもサポート『SALA』」を2年前に始め、現在は中国、ベトナム、フィリピン、ブラジル、アフガニスタン、パキスタンにルーツをもつ17人の子どもが参加しています。

この事業を始めたきっかけは、中国出身の子どもをもつ保護者からの相談でした。当時、その息子さんは中国で中学課程を修了して来日。高校へ入学させたいが、手続きや入試に不安があるという相談でした。そこで、私は業務時間外に入試のための学習サポートを始めました。始めた当時、彼は日本語にも自分のアイデンティティにも自信がなく、教科に出てくる言葉や文章が難しい様子で、恥ずかしがっていました。毎回、学習だけでなく、話を訊くうちに彼はポツポツ話し出すようになり、だんだん心を開いていき、日本語をはじめとする学習、自分自身にも自信がついてきたようでした。そんな日々が1年経ち、高校にも無事、入学。中国と日本の文化の中でアイデンティティを大切にしながら有意義に学校生活を送る彼の姿を見たときは安堵し、幸せを感じました。またその後も事があるごとに報告してくれるようになりました。

そんな彼や彼の家族と関わる中で、これは氷山の一角に過ぎないと思い、外国にルーツのある子どもやその保護者の方に積極的に声をかけていきました。そうすると、子どもたちからは宿題ができない、教科書に書かれていることがわからない、勉強の仕方がわからない、学校に行きたくない、保護者たちからは宿題を見てあげられない、学校の文書がわからないなどの悩みや相談が寄せられました。そこで、2年前にやっと「SALA」を開始し、「子どもの教育支援」「子どもの居場所」「保護者へのサポート」を3つの柱としたプログラムを進めることになりました。

来日間もない子ども、日本で生まれ育った子ども、日本以外で生まれ日本で育った子ども、ダブルの子どもなど、多様な文化背景をもつ子どもたちがいます。勉強の好きな子、嫌いな子、積極的な子、おとなしい子・・・性格も様々です。学習面では、日本語での日常会話には支障なく、友だちとのコミュニケーションがとれている子どもでも、算数の文章問題や作文の宿題では苦勞し、助けを求めてきます。日本の文化や日本人の感性が分からず、宿題ができないというケースもあります。



学習支援の内容は決まっておらず、子どもたちが持って来た宿題を見えています。宿題や学習をしたくない子どもも来ていますが、「SALA」に来るだけでもいいと思っています。宿題の内容は違うけれど、一緒にいる空間の中で外国にルーツをもつ子ども同士が交流することにより、子どもたちは「自分は自分でいい！」と気づいてくるようです。子どもたちは、スタッフやボランティアの人に遊んでもらったりして打ち解け、学校での出来事などを話してくれるようになってきます。一人でも多くの子どもたちが、明るい声に包まれた「SALA」でホッと、ここで自分の居場所を見つけてほしいと願っています。(公益財団法人 八尾市国際交流センター 「SALA」担当 : 藤戸 里美)

問合せ先: 八尾市国際交流センター 担当者 藤戸 里美

電話番号 072-924-3331

メールアドレス helloyic@helen.ocn.ne.jp

ホームページの URL <http://www.helloyic.or.jp>



特別寄稿

「多文化キッズキャンプ in 岩手山」 ～東北の外国につながる子どもの教育支援～

帝京大学教育学部 教授・おおさかこども多文化センター会員 土屋 千尋

編集部より

外国にルーツをもつ子どもの支援に関しては、外国人集住地域といわゆる散在地域とでは、抱える事情や課題も異なります。このたび、おおさかこども多文化センターの会員で、学校・大学・地域の連携・協働による外国人児童・生徒の学習環境づくりや日本語教育がご専門の土屋先生が、ご自身も関わっておられる東北地方での子ども支援についてご寄稿くださいました。

1月11日(土)・12日(日)、岩手山の麓にある国立青少年交流の家で、多文化キッズキャンプが開催されました。外国につながる子どもたちが冬やすみの宿題勉強、ソリあそび、室内ゲーム、絵本のよみかかせを楽しみました。このキャンプは盛岡市内の子どもと岩手大学学生の勉強会を目的に不定期に開催されていたものが年1回と定例化し、回を追うごとに県内外からの参加者も増えてきました。リピーターも多く、今年は釜石、陸前高田の沿岸部からはじめての参加があり、青森、岩手、宮城、福島の小中高生とその保護者、支援者、大学生、総勢50名が集まりました。以前は中国つながりの子どもが多かったですが、最近はフィリピンつながりの子どもが増え、他にインドネシア、パキスタン、ネパール、アメリカ、ウクライナなど多様になってきました。いわゆる東北の外国人散在地域では、子どもも支援者も数が少なく孤立しており、このキャンプは子どもだけでなく大人にとっても、仲間と直接顔をあわせて交流したり、情報の交換や共有をおこなったりする大切な場になっています。

東北では、外国につながる子どもが継続的に在籍する学校はめずらしく、日本語教室が常設されている学校も極端に数が少ないのです。仮にセンター校が設置されたとしても、そこに通学することは、公共交通機関の点からも困難で、更に冬期は積雪のためなお一層大変です。行政の施策がたてられにくく、予算措置もなされていないか、なされていても時限つきの場合が多いのです。子どもはある日突然学校にやってきます。知識や経験の全くない学級担任がその対応にあたることが多く、管理職等がみずから苦労して外部から支援者をさがしだし、ともに子どもを支援できたとしても、その子どもがいなくなったら、取り組みは終わり、それに関する経験が蓄積されないという課題をかかえています。国際結婚による子どもや、母親(結婚移住女性)が本国からよびよせた子どもが多く、家庭に支援が必要になるケースがみられ、子どもに対する支援が学校内では完結できないのです。



夜の交流会。

好きな果物を身体であらわしてみよう…「みかん」!

合宿に参加した支援者は、このような状況の中、地域で子どもや成人の学習支援をおこない、同時に学校に入って支援をおこなってきました。まったくの無償で支援したケースもあります。彼らが地域の教育支援を支えてきたといっても過言ではありません。しかし、目前の対象者のことだけを考えて支援するという形に終始すれば、その取り組みは閉じられたものとなり、対症療法的なもので終わってしまうでしょう。

教育支援が継続し、そして、よりよいものになっていくために、支援者同士のつながりを財産としていかし、学校、教育委員会、交流協会と、どのようにつながり協働態勢をとっていくかが課題解決の鍵になると考えています。まさに「大人のネットワーク」は「子どものセーフティーネット」なのです。今回の支援者同士の話し合いでも、連携・協働の取り方が議題の中心となりました。この4月から編成・実施がみとめられた文科省による日本語指導における「特別の教育課程」において、外部支援者がこれまでの経験を還元し、十分な役割をはたしていく上でも、この連携・協働の取り方はますます重要な課題となると考えられます。



イベント情報

▼「高校生活オリエンテーション」

日 時： 2014 年 3 月 29 日(土) 13:00~16:00

場 所： 大阪府立今宮工科高校

対象者： 26 年度大阪府立高校に入学する帰国・渡日生徒および保護者

内 容： 「学校のルール」「卒業後の進路」「学費」など、日本の高校生活で大切なこととお話しします。

卒業生の体験談も聞くことができます。保護者の方と一緒に参加してください。(通訳あり)

問合せ先： 大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご) Tel 050-3513-1497

大阪府教育委員会児童生徒支援課 Tel 06-6491-0351(内線 3435)

会員継続 および 新規登録のお願い

OKoTaC 通信をお読みくださるみなさまへ

おおさか子ども多文化センターは外国にルーツをもつ子どもたちの支援を目的に、大学教員、学校関係者、日本語教師、支援ボランティアなどを中心として 2011 年に発足し、この 2 月で 3 年になります。この間、みなさまのご協力とご参加のもと、多くの活動をしてまいりました。私たちが関わっている次の世代を担う子どもたちが必ず、しあわせな人生を送るとともに、平和で安全安心な多文化社会を築いてくれるものと信じています。

さて、本年も会員継続手続きの時期がまいりました。世間では景気がよくなりつつあるとのことですが、なかなか実感がわきません。そのような状況にもかかわらず、みなさまにご負担をお願いするのは恐縮ではございますが、NPO 活動をご支援いただくため、どうぞよろしくお願いいたします。

正会員： 会費 3,000 円/年 (別途入会金 1,000 円)

※OKoTaC 通信のご自宅へのご送付・各種イベント参加費の割引など、さまざまな特典があります。

賛助会員： 一口 1,000 円/年 (何口でも)

★新規ご入会のお問合せは下記までお願いします。会員の皆さまには、別途ご案内させていただきます。

NPO 法人 おおさか子ども多文化センター 代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL <http://okotac.org>

郵便振替 【記号・番号】 00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜいゆうけい))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』

(フリガナ：トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター)

